匠の技を知る 和ろうそくの魅力

江戸時代から国産原料100%、手作りの伝統を守り「三州岡崎和蝋燭」(郷土伝統工芸品)を作り続けている、磯部ろうそく店を訪ね、大将の磯部亮次さんと女将の有記枝さんに、お話を伺いました。

写真提供：磯部ろうそく店

「堀端の三角屋敷のろうそく屋」

当店は、岡崎城の東北の門「信濃門」の近く、お堀が前にあったので、通称「堀端の三角屋敷のろうそく屋」と呼ばれていました。主の名前に変遷はありますが、ろうそく作りを生業として、約300年この地にあります。

― ろうそくは、いつごろから どのように使われていましたか?

紀元前のものと言われている、エジプトなどの壁画に描かれていますので、人類はそのころから使っていたのではないでしょうか。日本には、聖徳太子の時代(600年ごろ)に蜜蝋(蜂から出る分泌物で作られるロウ)が渡来しました。1300年代には、木の実を搾ったロウでろうそくが作られるようになり、今と同じ和ろうそくが作られるようになったのは、江戸時代(1600年代)のことです。

その昔から高価な物でしたので、大きな寺院や貴族が使用するのみでした。江戸時代になっても、大名や上級武士、町人でも大店の使用品でしたが、しだいに手工業が盛んになり、江戸時代末期になると、庶民も使うようになっていきました。

明治時代に、洋ろうそく(現在の一般的なろうそく)が入ってきますが、まだ和ろうそくが主流でした(1960年代ぐらいまでは、農家の納屋などで使われていました)。しかし、工場で大量生産される洋ろうそくに押され、その後、徐々に電灯に変わって、和ろうそくは使われなくなっていきました。今は、寺院の需要と、家庭のお仏壇に使われることが主な用途で、生活必需品というよりも嗜好品といったかたちです。

和ろうそくの特徴

― 和ろうそくの特徴は何ですか?

芯と原材料に特徴があります。芯は太く、ろうそくの最後まで通っています。原材料は、芯がイグサ科の植物、ロウがウルシ科の植物から作られていて、100%天然素材です。そして、1本ずつロウを手掛けで芯に付けていくので、年輪のような模様があります。

― 和ろうそくにはどんな種類がありますか?

形は、棒型といかり型の2種類で、用途によって使い分けられます。

棒型

いかり型

大きさは、尺貫法の単位「匁(もんめ)」で分けられ、1匁=3.75gです。0.5匁～100匁以上まであります。通常の仏壇で使用される大きさが1匁です。燃焼時間は、0.5匁で、15分ぐらい。1匁で30分、100匁で6～7時間ぐらいです。

― 芯の特徴はどのようなことですか?

ろうそくが大きいと芯も太くなり、炎も大きくなります。100匁ろうそくの炎は、大きなお堂がある寺でないと怖くて使えないほど大きいです。

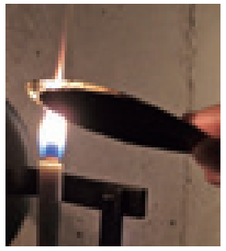
洋ろうそくと比べても、炎が大きいことがわかります。写真の左が洋ろうそく、右が和ろうそくです。

洋ろうそく:
芯は化学繊維の紐。細く、最後まで届いていない。

和ろうそく:
芯は和紙に灯芯草を巻いたもので円錐形。太く、最後まで芯がある。

また、風がない時でも自然に炎が揺らぎます。1/fの揺らぎといわれていて、癒しの効果があります(下図参照)。

芯は燃え残るため、「芯切り」という作業が必要ですが、最後まで通っているので、ロウを完全燃焼させることができます。火を消す時は、釣り鐘に柄が付いたような専用の火消し具を使います。吹き消すと、芯の周りに溶けているロウが飛び散る可能性があるからです。真上からかぶせて消すのですが、「芯を打つ」といいます。この言葉が落語家の最高位「真打」の語源と言われています。昔、寄席の灯りは全てろうそくでした。トリで、噺が終わり、高座から下がる時にろうそくの火を消したことから、「芯を打つ」→「真を打つ」→「真打」となりました。残り香も、藁を燃やしたような自然の香りです。



芯切り

― 原材料の特徴はどのようなことですか?

ハゼノキの実が原材料で、植物由来の環境にやさしいロウです。

燃えると煤が出ますが、石油由来のパラフィンが原材料の洋ろうそくよりも炭素結合が少ないため、煤の量が少なく、粘り気もなくサラッとしています。

また、二酸化炭素も発生しますが、光合成でハゼノキに吸収され、木の成長を助け、実をつけます。実からロウをつくる、ろうそくになるという自然の循環になっています。

江戸時代から、ロウを余すことなく使い切ることも続いています。お寺の行事で使用した和ろうそくは、残っても次に使うことはありませんので、回収して修理したり、ロウに戻して再利用したりしています。加えて、製造工程で出た切れ端から作業台に飛んで固まったロウまで、残ロウを集めて溶かし、再利用します。

再利用前の残ロウ

炎の揺らぎ:
時々、パチッ、パチッと音を立てながら、風がなくても揺らぐ。炎が揺れ始めると「ああ、息をしているな」と、職人さんが言う。

― 原料のロウは どのように作られているのですか?

原料となるハゼロウ(木ロウ)は、ハゼノキの実を砕いて蒸して圧搾機で搾り、固めたものです。そのハゼノキは、中国から沖縄、九州と伝わった木を、ロウを取りやすく品種改良した、7mほどになるウルシ科の高木です。

ハゼノキの実

実を採集するときにかぶれてしまうため、ハサミで枝ごと切り取りたいところですが、それをすると翌年からその部分に実が生らなくなってしまいます。ていねいに実をもぎ取らなければならないので、大変な作業です。

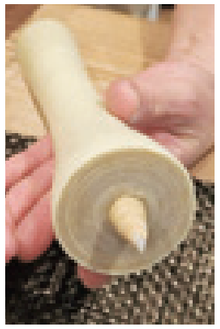
和ろうそくは、主に下掛け用と上掛け用の2種類のハゼロウを使用します。下掛け用は今年採ったハゼの実を搾ったもので、上掛け用は、ブドウハゼの実を倉庫で1年寝かせて、翌年搾ったものです。特別な時に上掛けに用いる「白ロウ」は、天日干しをして、色を完全に抜きます。「白ロウ」は、和ろうそく以外にも化粧品の基剤や和菓子の艶出しなど、幅広い用途があります。

ハゼロウ(学名:Japan Wax)
左:下掛け用、右:上掛け用

― 芯はどのように作られているのですか?

灯芯草というイグサ科の植物を和紙に巻いて、真綿で止めます。ろうそくの大きさに合わせて、芯も細いものから太いものまで様々あります。

上:芯の束、下:灯芯草


いかり型ろうそく(50匁)
手掛けの証、太い芯に年輪のように
何百回もロウが塗り重ねられている

和ろうそくの作り方

1 ロウを作る

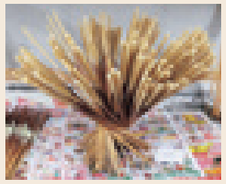
鍋でハゼロウを溶かし、ろうそくを作る準備をします。

2 芯にロウをつける

和ろうそく作り専用の竹串に芯を挿して、下掛けのロウをつけていきます。

まず、基本の形を作っていきます。ロウの付き具合を確かめながら、ろうそく同士がくっつかないようにします。

ロウは、75度ぐらいで液体になります。そこから37度ぐらいに下がると固体になります。この固体になる少し手前の液体(45度から50度ぐらい)に芯を浸し、竹串を回しながら素早く手でロウを塗り、乾かします。この作業をひたすら繰り返して、2日半〜3日間かけて目標のろうそくの大きさにします。


1束200本

いかり型ろうそくを作るための鉋
手の感覚だけでろうそくの胴部の曲線を削り出す

3 上掛け

太さや形が整ったら、上掛け用の「化粧ロウ」を塗ります。

4 芯出し

頭の部分を削って、隠れている芯を出していきます。大きいろうそくは包丁で芯を切り出します。

5 しり切り

温めた包丁で、長さを切り揃えます。

和ろうそく職人の仕事

― 職人として一人前になるには どれぐらいかかりますか?

最低でも二夏二冬ぐらいは必要ではないでしょうか。

ロウは暑い時期は固まりませんし、寒い時期はすぐに冷めて固まってしまいます。梅雨の時期は乾きません。四季折々でロウの手触りも違いますし、気温・湿度によっても違います。芯を中心に均一にロウを塗ったつもりでも形ができない。太いろうそくの頭出しは、包丁で芯の周りのロウを水平に切るのですが、水平にならないし、芯まで切り落としてしまうこともあります。仕事を毎日していく中で、すべて体で覚えていくしかありません。仕事の中の一連なので、特にここが突出して難しい、易しいということはないのです。

― ろうそく作りで気を遣うところはどこですか?

手仕事とはいえ、1回に2,000本ほど量産します。ですが、使う方は1本ずつ使うので、気持ちよく使っていただけるように、なるべく均一できれいに仕上げたいと思っています。

― 技の伝承はどのようにお考えですか?

昔は徒弟制度で、優秀な弟子が跡を継いでいきました。今は、弟子は取ってないですし、子供たちにも『継いで、続けるように』と、言ったことはありません。私の代はご注文がある限り、職人が作れる限り作っていこうという考えです。

― 今後はどんなことに挑戦したいですか?

この先、和ろうそくを生業としていくのはなかなか厳しいです。和ろうそくの普及のため、百貨店の物産展や海外での展示会に参加しました。10年ほど前はニューヨークのお店に出品したこともあります。

フィンランドの首都、ヘルシンキで行われた展示会では、期間中、質問攻めにあいました。洋ろうそくとは違い、天然素材で出来ていて、このフォルムを人間の手が作っているというところを評価してくださいました。

機会があれば、また海外でやってみたいと思っています。

仕事冥利に尽きること

ろうそく屋が忘れてはいけないことは、火が灯るものには、必ず人の思いとか、気持ちが入っているということだと思っています。

お寺の本堂の正面に立って、皆さんそこで手を合わせてくださる。手を合わせてもらうようなところの物を作れることのありがたさ。一生懸命念じられる人のことを考えて、その思いに応えていかないといけないと、常に思っています。

当店にお越しになるお客様は、何かしらの思いを持って、しかも、つらい目に遭われた方のほうが多いです。そういう方々の気持ちがろうそくで癒されるのであれば、それはありがたいことです。人の心の機微のところで仕事をさせてもらっているのかなと思っています。私どもはどこまでそのお客様の気持ちに寄り添って、お品を届けられるかが役割というか、やりがいです。

また、オール電化が増えて子供たちが直火を見る機会が少なくなりました。和ろうそくの灯りが身近に火を見る機会となって、心が動くのであれば良いことだなと思います。

取材を終えて

大将と女将さんの、お客様に寄り添う思いにあふれたお話を伺い、そのお人柄とろうそくの灯で、心が温かくなる取材でした。

作業場で「下掛け」の作業を見学させていただきました。そこは、竹串どうしと、竹串と台座がこすれるザッザ、ザッザというリズミカルな音、そして、ロウの鍋に芯をつけたときに、余分なロウが流れて澄んだ音をたてるだけの、ピンとした空気が流れるところでした。

■ 磯部ろうそく店ホームページ
https://www.isobe-r.jp/